焦土に残る怪

田中貢太郎

昭和九年三月二十一日の函館（はこだて）の大火は、その日の午後六時から翌朝の七時まで燃えつづけて、焼失家屋二万四千戸、死傷者三千人を出したが、その時火に追われた市民は、猛火の中をくぐって安全な場所から場所へと［＃「場所へと」は底本では「場戸へと」］逃げ廻った。しかし、風速三十メートルの烈風に煽（あお）られた猛火の中では、どうすることもできなかった。

　山から海へ、避難民は続々としておしかけたが、そこでもまた猛火に包まれて焼死する者、或（あるい）は海に入って溺死（できし）する者など、その惨状は全く眼のあてられないものがあった。

そのうちでも最も烈（はげ）しかったのは、函館市の東南になった大森浜であった。従ってここには、多くの哀話とともに鬼魅（きみ）悪い話が残っている。

深夜の海岸には、どこからともなくむせぶような、泣くような声が聞えて来る。青い鬼火（ひとだま）が、そこにもここにもふわふわと浮んで、それが烈しい勢（いきおい）で町の方に飛んだり、焼け残った樹木の枝や電柱にあたってばらばらとくだけた。

警官の一人が巡廻していると、眼の前へ髪をふり乱した女が出て来たが、その女は生れてまもない嬰児（あかんぼ）を負い、両手に幼い小供の手を曳（ひ）いていた。女は蒼白（あおじろ）い

顔を星の光にちらつかせながら、小供の手をぐいぐいと曳いた。
「おう、あついか、あついか」
女の足は早くなった。
「もうすこしじゃ、あついか、もうすこしじゃ」
その時背（せな）の嬰児（あかんぼ）がひいひいと云うようにないた。
「おう、おう、おう」
女は狂人（きちがい）のようになっていた。
「あついか、おう、あついか、もうすこしの、しんぼうじゃ」
女はそのまま海の方へ往ったが、みるみるその姿は

海の中へ消えて往った。

　これもやはり函館の大火が生んだ怪談である。某運転手が自動車をあやつって深夜の海岸を走っていた。そこは根崎海岸のドライブ道で、道幅もかなり広いし、それに障碍物（しょうがいぶつ）がないので、運転手はいい気もちになってスピードを出していた。

　と、その車の前にふらふらと飛びだして来たものがあった。運転手ははっとして、機械的にブレーキをかけた。車はその怪しい物の数間（けん）てまえでやっと停（とま）った。そこにはヘッドライトの燈に照らされて角巻（かくまき）をした壮（わか）

い女がいた。女は何者かに追われてでもいるように非常にあわてていた。

「助けてッ」

女は蒼白(あおじろ)い顔に髪をふり乱していた。

「助けてッ」

女の声がまた聞えた。それを見ると運転手は捨てておけないのでいきなり扉(ドア)を開けた。

「どうした、どうした」

運転手はそのまま女の傍へ往った。運転手は女を車へ乗せて女を追っている悪漢(わるもの)の手から救おうとした。

運転手は怒鳴(どな)った。

「さあ、車だ」

それとともに女をつかまえようとすると、女の姿は煙のように海のほうへ消えて往った。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　２００３（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　　１９３４（昭和９）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２０１０年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。